

佐伯史談

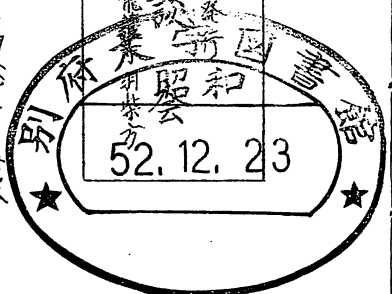
第二二二号

「郷土史研究」巻
通算一三三号

昭和五十二年十二月十六日發

佐伯史談

事務所 佐伯市大字稻垣宮前



後援

その没後三百五十年に當つて――

藩祖 高政公を頌える

――毛利神社例祭の席上での言葉――

天峯会会長 山中道夫

皆様 早々からご列席、有難うございます。

高政公は寛永五辰年の今月今日、江戸でございまして、御年

七十七歳、高輪東禅寺へご葬送、

養賢寺殿前勢州刺史執外紹元大居士

三百五十四忌に当ります。

高政公は靈廟記の通り、権偉卓犖武武果斬、剛毅濶達
のお人板で、初陣は秀吉の柴田勝家との戦ヶ嶽合戦で二
十五歳、敵と鎧を合せて疵を被り、秀吉公より御威状
を賜りました。

朝鮮役では水營の海戦、南原城の攻略で殊勲を立てま
した。南原は明軍が我軍の北進を喰止めようとして、ここを
第一の防禦線として、堅固に固めていました。我軍の攻

撃に城門を開いて出動の敵兵を、高政公は焔魔王四海波
と称する大筒をもつて、七町の距離から砲撃、着弾正確、
敵兵合せて四十を討取り、鼻を名護屋の秀吉公に送った
のであります。

水營の海戦は、我軍の苦戦でありました。タイタン
ムロの向側鳴梁渡に、朝鮮水軍の統制本陣、率 藩船
の大船十四艘、其外数
百艘がたむろしている
のを、我軍は是非共衆
取るべしと下知せられ
高政公は諸將に先だち
疎の番船に切入り奮戦
その比類なき働きを賞
讃され、御威状を賜わ
つたのであります。

頼山陽の「日本外史」
に何か載つて居りはせ
ぬかと、古い本を蔵か
ら出して見ますと、あ
りました。

天正十九年十二月、
秀吉諸將に朝鮮地圖を

後号の内容

- 後援 藩祖高政公を頌える(山中道夫)……一
- 要覧 大神佐伯氏の出現(御手洗一雨)……三
- 〃 豊後国司の戸籍(御手洗一雨)……三
- 〃 算龍護寺の手親音の寄進……五
- 〃 佐伯千葉市から(小坂盛雄)……六
- 〃 種寛 佐伯藩(橋本和雄)……七
- 〃 聖蹟 藩祖高政公五〇年祭……三五
- 〃 漆料 佐伯惟治公の御生害……三五
- 〃 當番 満洲佐伯村お成之番(〇)……三五
- 〃 記録 わかふるさと(元目慈)……三五
- 〃 対馬の歴史をめぐって(古藤田水)……三五
- 〃 西北九州新修旅行記……三五
- 〃 平告 大友宗麟の墓と訪ねる……三五
- 〃 西徳 欽示権威(羽柴弘)……三五
- 〃 後援 當りてどう、その他……三五

示し、西南諸國の兵を八軍と為し朝鮮八道に向かい、加藤清正を第一軍の將、小西行長を第二軍の將、二くと先鋒とし、第三軍黒田長政、第四軍は高政公と島津義弘を大將とした。第五が福島正則、第六蜂須賀家政、第七小早川隆景之花宗茂、第八軍が毛利輝元、何れも歴史に有名な大將ばかりであります。また別に水軍を置き、水陸九軍、総勢十五万。

明くれば文祿元年、秀吉は加藤清正を召し、「この機は信長公より賜はる所なり」と云つて賜わり、小西は馬と賜わりました。

二月京都を発し、途中嚴島神社に参詣して戦勝を祈願、那古屋(肥前名護屋)に至り、諸軍を合せ凡そ五十万、先ず水陸九軍七砲を打ち放し、潮の声を挙げて出発しました。四月釜山、五月京城を陥し、何れもというスビード戦果で、小西は平壤、加藤は咸鏡道に、島津義弘、毛利高政が江原道に進んだと、是に、敵の大將元豪、龜尾滿の蜂須賀家政を襲つて破り、勢いに乗じ春川の高政公の陣に向つて攻めて来ました。高政公は兵を伏せ、元豪の勢を誇り込み打つて撃滅、遂に元豪を擲にする大戦果を挙げたのであります。

先日毛利様は日本外史を持つて参りますと、大変喜んで下さいました。

尚、加藤清正は咸鏡北道の満州境の間島まで攻め込み、朝鮮二王子を擄はし、「もう敵はおらんかい」と云つたことから、今もその所に地名となつて残つております。清正安邊に引上げの途中海浜に出たと、海上遙かに高い山を望み、捕虜に問うたら「富士山だ」というので、加藤清正は馬からおり、背を脱いで伏し拝んだといふことが伝えられております。

高政公の砲術は天下に鳴り、鍛練の功を積んだばかりでなく、各所の戦場で目覚ましい御奮戦をなされました。オリンピック選手クレー射撃の安斎実氏の著書「砲術」にも詳しく書いてあります。

仙台藩第二代伊達忠宗公は、元和七年高政公に入門砲術の奥儀を學び、二十餘の距離から下げた水綿針を撃ち落とすほどの名手になりました。ある時伊達家の留守居改谷田作兵衛という人が毛利家に来て、「私方の先祖が此旗様の御先祖から、砲術の御指南を受けた記録が見付かりましたか、如何なる御座りませうか」と云へて参りました。これに対し「大坂御代より御大身のお方へお心安く御出合に成され、殊に権現様江戸へ御城お築きの節より、紹元様御咄し、廣候被為召候程の御義にて、年始の御礼でも元日に御登城其時分御大身薩摩、悪田、福島、福島、池田様へも御伝授、其御陸奥守様御懇望にて御流義の奥儀御伝授被遊候、其他にも、分、薩の御座候由承伝申候」と云つて、谷田作兵衛感心して帰つて行きました。

秀吉公の側近で豊後には封せられた、所謂豊後七人衆の中、三百年安泰であつたのは、佐伯藩だけではありません。高政公の御偉勲の賜物であります。

三の丸に上つて来て樓門をくぐり、石畳を踏及心字池に立つと、朝鮮松の松風が、昔を語つてくれるような気がします。東京の毛利様は本日は、高政公の朝鮮役の御芳名を思ひ、朝から梅干を食べて、こちらを選擇される由であります。私共御下賜の飯頭を戴き、高政公の御偉勲と御歴代様の御高恩を、家族の者と共に感謝致し度いと思ひます。

御静聴有難うございました。

(おわり)